分科会の報告

小学校低学年の分科会

○きちんとしている先生ときちんとしていない先生という話題があったが、そのことはクラスで勉強が出来ているか、できていないかということには関係ないのだろうか。

○子どもたちを管理的に指導するということとは違って、学習ができる規律のあるクラスにすることは基本的に必要なこと

○保護者のアンケートで評価を知る時期だが、自分が一生懸命やったことが評価されていないとがっかりする。

○評価は気にしないでいる。いろんな保護者がいる。自分が小さい時から学校というものにいいイメージを持っていない親は学校のことをあまり知ろうとしないで、悪い評価を付けてくることが多い。ちゃんとわかってくれる保護者も多いので、振り回されないようにしたほうがいい。

○特別支援の学級でひとりひとりの子どもたちに力をつけることを一生懸命やったが、保護者に「子どもどうしの関わりが少なかった」といわれてショックだった。

○特別支援教育には学校の骨太の方針が必要だ。教師が一人で指導しているというのではなく学校全体で指導しているというスタンスが必要。

○低学年で落ち着いている子どもたちが高学年になったとき、どんな風に変わっていくのかが心配。係りや当番活動の決め方は1年生では一人一役から始まる。2年生では少しずつ自分たちで決めるやり方を入れている。しかし、高学年になっても、一人一役できちんと決められていることが多い。教師が決めた通りにするともめることはないし教師がとても楽。子どもどうしが関わりを広げていくためにも自分たちで決められるようにしたい。

小学校中学年の分科会

　　それぞれの学校、学級の様子や困っていることなどを出し合いながらざっくばらんに話し合いました。シンポジウムで出された規律のある学級については、どこの学校にもそういう先生はいるということでした。そして、周りに影響を与えている場合もあれば独自の存在である場合もあること、学級づくりの中で示唆を得ることもあり、一律に否定するべきではないが、子どもたちがやらされていると感じていたり、自己主張を押さえていたりするのはいけないということが話されました。担任が変わるとその学級が荒れた例も出されました。

　　保護者対応の困難さもいろいろ出されました。新任の先生からは、職場の方がある程度力になってもらってたすけられているとしい話もあり、個人に任せるのではなく学校全体で対応することの必要性が話されました。また、難しい保護者に対してはとにかく話を聞いていくことは重要だが、「かまのふた」効果ということもあって、一方的に受け止めるだけでは相手の言い分がエスカレートする場合もあるので、言うべきことはその場できちんと主張していくことも大事だという話もありました。

　　学級づくりの中で、席順の決め方とか班づくりの問題とか話は多岐にわたりました。普段思っていることや悩んでいることがフランクに出されて、それぞれの思いに共感したりちがう視点が示されたりして、時間が早く過ぎていった感じです。その意味で有意義な時間になりました。

小学校高学年･中学校の分科会

　　参加者がのほとんどが退職者（再任用で教壇に立つものも含む）で、現職者は採用試験合格の講師の方だったこともあり、その人の悩みに答えながら、自分たちがどんなにして一人前といえる教師になっていったのかをそれぞれが出し合い、みんな悩みながら教師としての自覚を培っていったことを話し合った。

　　初めて教壇に立つときは誰でも不安であり、担任として上手くやっていけるだろうかと心配にもなるが、職場の同僚にいろいろ聞いたり、研修会や自主的なサークルなどに積極的に参加をしていくことで、いろいろ学ぶことができ力量をつけていくことができる。

　　失敗を恐れていてはなにもできないし、失敗のなかから多くのことを学ぶことができる。子どもからも学ぶことができるものである。

といったことが和気藹々と話し合われた。